

高齢者を取りまくコミュニティの実態（鹿児島県笠沙町の事例）その 4

－高齢者と同居子・別居子とのかかわりからみた生活支援－

正会員○雪丸 久徳^{*3}同 友清 貴和^{*1}同 古川 恵子^{*2}

高齢者 つきあい 同居子 別居子

1. はじめに

本稿は、前報^{*1)*2)*3)}に引き続き、過疎化と高齢化が進行している地方地域の高齢者の生活を支える要因を明らかにしようとするものである。

2. 研究の目的と方法

【目的】本稿は、これまでの結果をふまえ、高齢者の子どものかかわりと、近隣とのつきあいを分析軸として、支援の状況を把握することを目的とする。ここでいうつき合いとは、主として「日常生活における私的で自発的なものをいい、強制されるものではない」と定義する。

【方法】前回調査の6集落に加え、地形特性からも分析するために、平坦地である集落を1つ追加し、新たなヒアリング調査を行った。調査対象世帯は、6集落については前回と同じ世帯とした。

3. 調査概要

3-1. 調査方法

調査期間は平成13年9月の4日間。7集落の人々に対してヒアリング調査を実施し、8月と11月に事前、事後調査を行った。【図1】主な調査内容は、①高齢者のつき合いの相手とその内容、②緊急時の支援、③外出行動とそれに対する支援、④集落の人のつながり、⑤身体状況や施設利用、等である。回答者数は92/117人、回答率は78.0%である。回答者は1世帯1人で、世帯主か配偶者である。回答者がいずれであっても世帯としてのつきあいに関連するものとする。

1. 市崎木場
2. 松木場
3. 高崎山
4. 谷山
5. 小崎
6. 魚路
7. 野間池

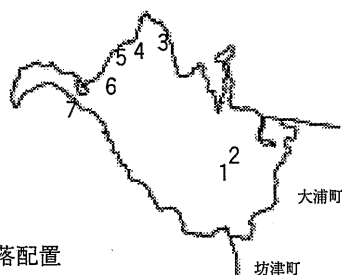


図1. 笠沙町対象集落配置

表1. 調査対象集落の概要

集落名	全人口 (人)*	高齢化率 (%)	独居老人世帯比率 (%)*	調査対象世帯数 (世帯)
町全体	3,951	42.2	23.8	92
市崎木場	57	52.6	20.0	15
松木場	74	62.2	37.8	17
高崎山	15	80.0	54.5	5
谷山	35	51.4	27.8	10
小崎	16	37.5	33.3	4
魚路	40	57.5	23.5	13
野間池	263	35.7	18.3	28

3-2. 調査の対象と概要

笠沙町は、人口3,951人、高齢化率42.2%（平成13年）、町内に農・山・漁村集落を抱え、高齢化、過疎化の進んでいる町である。薩摩半島の西南端に位置し、周囲は東シナ海に面する典型的なりアス式海岸が続いている。調査対象集落は、1999年の調査集落に新たに野間池を追加し、市崎木場、松木場、高崎山、谷山、小崎、魚路の7集落とした。小崎と野間池が平坦地である以外は、傾斜地の集落である。市崎木場、松木場、高崎山、小崎、野間池は道路沿いに、谷山と魚路は、国道から300～400m入り込んだところに広がっている。回答者は、後期高齢者が半数を超え、また、単身世帯が全体の約36%を占めている。【表1】【表2】

4. 調査結果と分析

4-1. 子どもとの関係

4-1-1. 同居子がいる高齢者

同居子がいる高齢者29人中、別居子もいる高齢者は26人いる。同居子がしてくれること（複数回答）は、「買い物」や「力仕事」、「車に乗せてくれる」、「薬をとってきてくれる」、「病院への付き添い」等で、別居子がしてくれることは、「家事の手伝い」、「車に乗せてくれる」、「買い物」等である。

別居子と話をするときには、「盆・暮れ・正月」、「家に来てくれた時」、「ただ話をしたい時」等で、話す頻度（別居子全員について）は、「月に1、2回」が最も多く、「その他（たまに、1/2ヵ月、1/2年）」、「週に1、2回」、「ほぼ毎日」と続く。話す方法は、町内や近隣市町の別居子とは直接会って話し、それ以外は電話を用いている。【表3】【表4】

4-1-2. 単身高齢者

単身高齢者33人中、子どもがいる高齢者は27人である。別居子がしてくれることは、多い順に、「元氣か声をかけたり様子を見たり」、「車に乗せてくれ

表2. 調査対象者の属性

調査項目	人 (%)	調査項目	人 (%)
性別		年齢	
男	27 (29.3)	65歳以上～75歳未満	37 (40.2)
女	65 (70.7)	75歳以上	48 (52.2)
世帯類型		65歳未満	7 (7.6)
単身	33 (35.9)	職業	
夫婦のみ	29 (31.5)	無職	67 (72.8)
親子	23 (25.0)	農業	15 (16.3)
三世帯	6 (6.5)	漁業	2 (2.2)
その他	1 (1.1)	その他	6 (6.5)
各項目合計(92人)		無回答	2 (2.2)

A Study on the Community of Elderly people(using Kasasa-cho in Kagoshima prefecture as a Model)part4

The aspect of the living support for the elderly people view from the relation by elderly people and a living-together child - a separation child.

FURUKAWA Keiko, TOMOKIYO Takakazu and YUKIMARU Hisanori

る」、「相談したり、されたり」等である。

別居子と話をするときは、「ただ話をしたい時」が多く、「盆・暮れ・正月」、「相談事があるとき」と続く。話す頻度（別居子全員について）は、「月に1、2回」が最も多く、次いで「週に1、2回」である。話す方法は、電話、直接の他に、手紙とFAX（耳が遠いから）がある。【表3】【表4】

表3. 別居子がしてくれる内容（多い順）

順位	同居子がいる高齢者	単身高齢者
1	買い物	元気が声をかけたり・・・
2	力仕事	車に乗せてくれる
3	車に乗せてくれる	相談したりされたり
4	薬を取ってきてくれる	家事の手伝い
5	病院への付き添い	代わりに買い物

表4. 別居子全員と話す頻度

頻度	同居子がいる高齢者		単身高齢者	
ほぼ毎日	5/26人	19.2%	8/27人	29.6%
週に1、2回	8/26人	30.8%	26/27人	96.3%
月に1、2回	20/26人	76.9%	34/27人	125.9%
その他	8/26人	30.8%	14/27人	51.9%

4-1-3. 緊急時に頼れる子どもが集落内に住んでいない単身高齢者

緊急時に頼れる人として子どもをあげている単身高齢者が10人いるが、集落内に居住していない子供が7人いる。高齢者の場合、緊急時の対応や支援が重要な課題である。

4-2. 近隣とのつきあい

緊急時に頼れる最も近い人の居住地が集落内であると答えている単身高齢者は、(25/33)人、夫婦世帯で(17/30)人である。緊急時に頼れる人として、集落内の人をあげなかった単身高齢者8人について、日常のつきあいをみると、近所の人と道端で声をかけあったり、互いの家を行き来して、自分で作った花や野菜をあげたり料理やいただきもののおすそ分けをする等、日常的につきあいをしている。8人のうちの2人のつきあいの様子を【図2】【図3】に示す。一方、単身高齢者で別居子とほとんど話をしない人が2人^{*4)}いるが、近所の人と日常のつきあいがされており、それぞれ緊急時には近所の2人、隣の従兄弟を頼れるとしている。また、集落によっては、世話役が安否確認を行っているため、緊急時の対応や支援の広がり期待できる。つまり、単身高齢者の多くが、いざという時にすぐだれ

表5. 緊急時に頼れる最も近い人の居住地

家族形態	集落内			町内	近隣町	県内	その他	なし	合計
	隣	近所	その他						
単身世帯	8	15	2	1	2	2	1	2	33
夫婦世帯	5	12	0	4	2	1	1	5	30

※1 鹿児島大学教授・工博

※2 鹿児島女子短期大学教授

※3 鹿児島大学大学院 博士前期課程

かに駆けつけてもらえるといえる。

5. まとめ

同・別居子と高齢者とのかわりにおいて、同居子がいる高齢者は、別居子から主に物理的な支援を受けている一方、単身高齢者は、主に精神的な支援を受けていることが明らかになった。しかし、同居子の有無にかかわらず、別居子と話す頻度は高いとはいいがたい結果も得られた。

また、緊急時に頼れる人として、集落内の人をあげていない高齢者や、別居子とほとんど話をしない高齢者がいることも明らかになった。しかしながら、そのような高齢者も、近隣の人と元気が声をかけあったり、車にのせてもらうなどのつきあいがなされており、子どもが支援できない部分を地域の日常的なつきあいが補完していると考えられる。

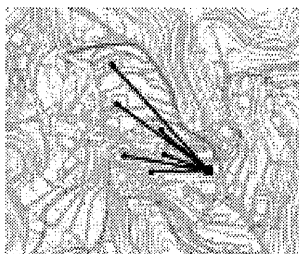


図2. 単身高齢者のつきあい（事例1）

67歳。集落の主事が電気がついていないときはたずねて行くなど気をつけている。作った花や野菜をあげたりもらったりしている。台風時には近くのひとり暮らしの人の家に避難した。

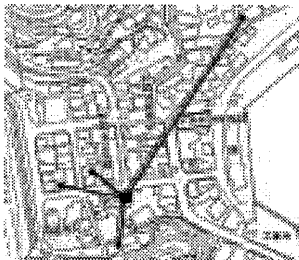


図3. 単身高齢者のつきあい（事例2）

87歳。娘が鹿児島市から付きに3、4回帰ってくるし、近くの友人とは毎日お互いの家を行き来して、精神的にも物理的にも活発な付き合いをしている。

【注】

*1) 古川恵子・友清貴和：高齢者をとりまくコミュニティの実態（鹿児島県笠沙町の事例）その3 一日常の生活行動に関する集落間の比較一，日本建築学会大会学術講演梗概集 6037, 2000.9, pp539-540

*2) 古川恵子・友清貴和：農村地域の高齢者福祉を視野に入れた交際関係の分析，農村計画学会論文集 第3集（農村計画学会誌第20巻別冊），pp145-150, 2001.12

*3) 古川恵子・友清貴和・角征一郎：高齢者をとりまくコミュニティの実態（鹿児島県笠沙町の事例）その4 一高齢者の付き合いの広がり外出行動にみる生活支援一，日本建築学会九州支部研究報告 第41号 2000.3

*4) 80歳・男性一公民館の集まりにはいつも行く。毎日自宅近くの墓参りに行く。そこで近所の人達と会い、元気が声をかけるなどする。田畑は持っていない。88歳・女性一デイサービスの3回/週行くのが楽しみ。通院には近所の仲間が車に乗せていってくれる。野菜を自分で採っている。公民館の集まりには時々行く。元気が声をかけるのはお互いで行っているが、病院の付き添い、車、薬とりはしてもらっている。

Prof., Dept. of architecture, Kagoshima Univ., Dr. Eng

Prof., Kagoshima Women's Junior College

Graduate school, Dept. of architecture, Kagoshima Univ